

近世における『源氏物語』の浸透

——伊達紋・袱紗・櫛・簪の雛形本に注目して——

小 島 由 子

はじめに

かつて、人々は文芸を身に着けていた。このことは、切畑健「文芸を着る―和歌・物語・謡曲―」（大手前比較文化研究叢書2『視覚文化の研究』収録 思文閣出版 二〇〇四年四月）が、着物の文様と古典文芸との関わりを概説している。

切畑論文では、近世小袖と『源氏物語』の関係についても言及する。だが、近世における服飾類と『源氏物語』の関係、および『源氏物語』がいかに庶民レベルまで浸透していたかを検証するのであれば、小袖よりも廉価で身近なものにまで目を向けるべきではないか。

右の視点で調査した結果、伊達紋・袱紗・櫛・簪（かんざし）にも『源氏物語』を用いている事例が、それぞれの雛形本（当時のデ

ザインブック）の中に見出せた。今回、雛形本を利用したのは、
① 伊達紋・袱紗・櫛・簪の現物は、あまり伝存していない。
② 現物が伝存していても、年代の特定が困難である。
③ 雛形本には、多くの図版が掲載されており、かつ出版物であるから刊行時期の特定もしやすい。
という理由からである。

一 伊達紋と『源氏物語』

さて、江戸時代ほど、紋所が脚光を浴びた時代はない。中でも、伊達紋と呼ばれる紋は華やかなものである。特に、伊達紋は、小袖模様とも切り離せない関係にあり、小袖模様同様に文芸的な要素を含み込んでいる。元禄期あたりになると、儀礼目的の「家紋（定紋）」ではなく、装飾目的に考案された「替え紋」「飾り紋」の類が

出現する。近世における「飾り紋」の種類には、「加賀紋」「崩し紋」「比翼紋」「鹿子紋」「丹前紋」「伊達紋」などがある。

① 定紋から変化したもの

・加賀紋

中央に本来の家紋を置き、その周囲に花鳥風月などの模様を装飾したもの。『万金産業袋』（享保十七年（一七三二））には「かが絹を黒にして此類にゆふぜん小色を入れて染置、是れがかがもん共お国紋ともいふ」とある。加賀国の人が多く用いた。

・崩し紋

本来の家紋を崩し作り変えた紋。この紋は、おしゃれのためというよりも、特に男性が、悪所といわれた遊廓・芝居小屋に行く際、自分の素性を公にしない目的で用いられた。

・比翼紋

男性の定紋と、女性の替え紋を並べたり組み合わせた紋。この紋は遊女が始めたが、一般にも広がったらしい。

・鹿子紋

定紋を鹿子絞りにしたもの。『万金産業袋』には、定紋の他に「丸にむかう梅、丸にいてう、花の丸などを、かの子一色に染おく、是を居（すは）り紋といふ」ともある。

② 装飾のみを目的とした紋

・丹前紋

伊達紋より大きく、華美風流で遊び心に富んだ紋。井村勝吉『丹前ひいなかた』（宝永二年（一七〇四）刊）には、丹前紋が十一図収められている。

・伊達紋

絵や文字を用い、花鳥風月・古歌・名所・故事・文芸などに因んで表現した紋。

これらの他に、鬘貞の歌舞伎役者の紋を勝手に流用したり、崩し紋にして用いたりすることも流行した。

「飾り紋」の中でも、装飾性の高い伊達紋は特に注目すべきであると考え、伊達紋の雛形本で『源氏物語』との関わりを調べた。その結果、『女中達紋尽』（岩瀬文庫蔵）・『当世達紋袖鏡』（個人蔵）・『伊達紋雛形』（岩瀬文庫蔵）において、『源氏物語』との関わりが見出せた。

① 『女中達紋尽』

同書は、当初、元禄十年（一六九七）刊の『当流模様雛形松の月』（上中下の三巻三冊）の下巻に収められていたらしい。上野佐江子編『小袖模様雛形本集成』（学習研究社 一九七四年刊）解題に、

当書の下巻は、おそらく「女中達紋尽」と内題され、一頁を二行・三段にして六図づつの伊達紋が八丁半あり、これに加えて「替り作紋絵鑑」が十三丁ほどあったのではないかと考えられる。

とする。ただし、『当流模様雛形松の月』は完本の現存が確認できない。以下、岩瀬文庫蔵『女中達紋尽』（刊年未詳）で説明を行う。『女中達紋尽』には、『源氏物語』を意識と思われる図が複数存在する。

・女三宮の模様

めくれ上がった御簾の端に猫がおり、文字で「女三」と書かれている。



・柏木の模様

蹴鞠の絵と「柏木」という文字で構成されている。

・須磨の模様および明石の模様

② 『当世達紋袖鏡』

上下の二巻二冊からなる。序文に、

当世模様を省て紋とし是を名づけて伊達紋といふ其中に葉手なるあり、こうとふなる有、又は風雅成あり、いやしき有、花車成有、何れ一ならずといへども、其好にまかせて目前に筆をとるがごとく風流花美を尽して、以双巻とす

明和六年

丑七月吉日

菊秀軒粹



百十六
紅葉賀もみぢのゑ

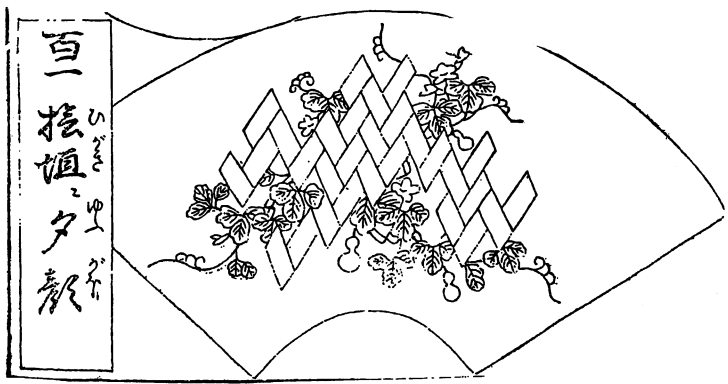


卷末に、

作者 洛陽絵師三文字屋弥四郎

書林 京寺町通松原下ル町 菊屋喜兵衛板

となつてゐる。絵師の三文字屋弥四郎は、『当世模様雛形千歳草』
(宝曆四年〔一七五四〕刊)・『雛形春日山』(明和五年〔一七六八〕
刊)・『雛形伊関川』(同上)などと関わり、小袖模様を描いている。
『源氏物語』と関わる図柄は、「檜垣に夕顔」と「もみぢの葉と鳥
甲」がある。これらは、「夕顔」の巻に、「この家のかたはらに、檜



百一
檜垣夕顔いぎぎきゆうが

垣というものの新しくして」の一節があるので、それを意識しての図柄と、「紅葉賀」の巻で、秋の行幸の日、源氏は頭中将と青海波を舞う、その場面を表現してのもだろう。その他、竹を節から折り曲げて、源氏香の図や源氏蝶の図なども見える。

③ 『伊達紋雛形』

すべて切り紙風である。あるいは染め型などに用いられたのかもされない。『小袖模様雛形本集成』解題に、

明和七年刊の書籍目録の「雛形」の項の末尾に、宝暦八年に出版されている『雛形柳の錦』の記載があり、次一行あけて「二(冊)伊達紋雛形忠七」……と記されている。

と指摘されている。『伊達紋雛形』初版は、宝暦明和頃の刊行であろう。全体が切り紙風になっているので、図柄はシンプルなものである。『源氏物語』に関する図柄は、文字だけで表現された「須磨」「胡蝶」「松風」、絵で表現されているものには「葵と御所車」がある。伊達紋と『源氏物語』の関わりは、従来指摘されたことがなかった。だが、右のような事例が確認できる。しかし、伊達紋よりもさらに身近なものにも、『源氏物語』との繋がりが見られる。

二 袱紗と『源氏物語』

西川祐信『西川ひな形』（享保三年〔二七一八〕刊）は、従来、

近世における『源氏物語』の浸透

ニューヨーク公共図書館のもののみが知られていた。松平進『師宣祐信絵本書誌』（日本書誌学大系57 青裳堂書店 一九八八年）から、必要な部分のみ転記する。

体裁 半紙本。五卷五冊。袋綴。

表紙 原表紙。焦茶色表紙。

寸法 縦二一・〇糎×横十五・九糎。

丁数 一卷二三丁、二卷二二丁、三卷一二丁、四卷一二丁、五

巻一二丁。

序文

序

行川の流はたへずして、しかももとの模様にもあらず、芳野川の花に染、龍田川の紅葉と、うつり替る飛鳥川、きのふの仕出し模様も今日はふるめかしく、時々折々の雛形所々にまち／＼なり、爰に画工祐信頃日の替り模様を集、手をつくし筆をつくし絵画しを求て梓にきざみ、世の重宝ともならんかし、全他をまじへず、祐信の一筆なればあからさまに西川ひな形と題す

つちのへ戊中春 八文字自笑

跋・奥書

跋

浪花の冬梅いまだ姿の意、人しらぬ恋に染る深窓をわかち、色

直しにすらしき志の脇留、物好は情のほひを包ふくさの風景、合部五冊新に画工をうごかしぬるを、八文字自笑幼友のしたしみ念様に順て、するどき墨も春秋に進、夏毛冬毛の筆に力を出せしことなん

百人女郎品定 全部五冊追付出来

三丁表

又はぬい すなご入にても
貳番 夏 ばたん岩

享保三年戌三月吉日 大和画師 西川祐信

板木師松屋町 石原半兵衛

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町 八文字屋八左衛門新板

三丁裏

又すみゑにても 金でい引
三番 秋 菊水のながれ

本書の内容は、序文・跋文からもうかがわれるが、巻一から巻四までが小袖図、巻五が袱紗図である。巻一「深窓」、巻二「色直」、巻三「脇留」、巻四「物好」と題され、巻一から巻三は娘用の小袖図、巻四は男用の小袖図を示す。

四丁表

又すなごふり
四番 冬 雪中の松 汀のこほり 水仙花

ニューヨーク公共図書館本をマイクロフィルムで取り寄せたところ、巻五「袱紗」に、注目すべき事例を含むがわかった。従来、明示されたことのない資料であるから、巻五全体の内容を説明する。

四丁裏

又すみゑにても 雲どり すなごふり
五番 春 桜がりのもやう

一丁表 「服紗」の文字と、浜辺と松の図

五丁表

さいしきゑ
六番 夏 さなへのもやう

一丁裏 二丁表 町人の娘三人が、源氏絵の模様「浮舟」を手にしながら会話している。

よいもやうの

五丁裏

又すみ絵にても すなご入 又はでい引
七番 秋 月にきぬたのもやう

おもしろいゑじや

うすざいしきゑ すなご でい引入

六丁表 八番 冬 雪中の馬上的もやう

すみゑ

うすざいしき でのい引入

六丁裏 九番 春 源氏 花のゑん

さいしきゑ 但し雲すなご

又はでのい引

七丁表 十番 夏 源氏 夕顔の巻

さいしきゑ 又すみゑにても

雲すなご でのい引

七丁裏 十一番 秋 源氏 夕ぎりの巻

さいしきにても

すみゑにても でのい入

八丁表 十二番 冬 源氏 あさがほの巻

さいしき絵 雲どり しもふり すなごにても

八丁裏 十三番 春 太夫絵 嶋原大門口のてい

うすざいしき でのい引 すなご入

九丁表 十四番 夏 太夫絵 夕すゝみのてい

さいしき

又はすみゑ でのい入

九丁裏 十五番 秋 太夫絵 月見のてい

うすざいしき

又は中ざいしきにても でのい入

十丁表 十六番 冬 太夫絵 雪の庭のもやう

極ざいしき でのい入

十丁裏 十七番 春 町風 すがたゑ 軒の梅のもやう

さいしきゑ でのい入

十二丁表 十八番 夏 町風流絵 夜ほと、ぎすのもやう

うすざいしき

十一丁裏 十九番 秋 町風 若衆絵 菊の会の図

さいしきゑ

十二丁表 二十番 冬 野郎絵 顔見せ 余情の図

さいしきゑ

四季図・源氏図・太夫図・町人図などが描かれている。砂子・彩色・泥引などの指示も具体的である。

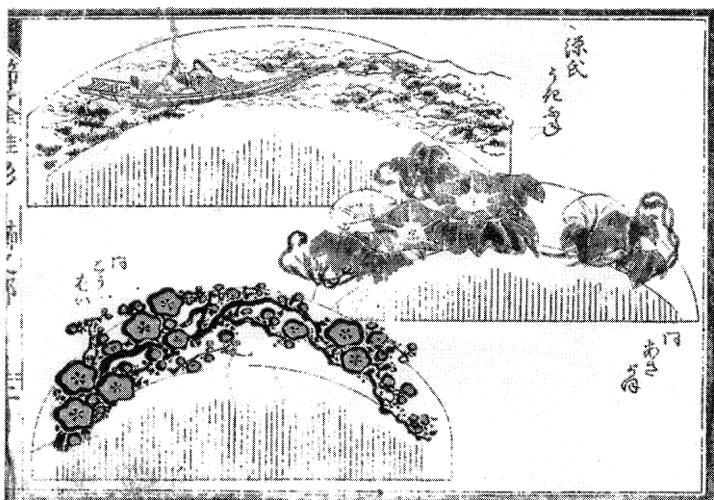
『源氏物語』との関わりで注目すべきは、一丁裏二丁表、六丁裏から八丁表である。一丁裏二丁表の図は、特に重要と思う。町人がこういった源氏絵の袂紗を使っていたことを明確に示している。近世における『源氏物語』の浸透を現在知られるものの中で、最も明瞭な形で我々に教えてくれる。町人と思われる三人の娘が、「浮舟」の図を手にとりながら、「よいもやうの」「おもしろいゑじや」「舟



にふたりのつてござんす」と、楽しそうに語り合っている。『源氏物語』の図が、いかに愛されていたかを如実に表している。

ただ、残念ながら、一丁裏・二丁表、七丁裏、八丁表には汚れなどがあった。改めて調査したところ、国内の三井家文庫が端本（二・三・五巻存、ただし五巻七丁表は破損欠）を所蔵しているが判明した。図版としては、三井家文庫本を用いる。

『西川ひな形』の収録の袱紗図には、細かい細工の仕様が書かれており、実際に作られたことが想定できる。画工も当時上方で浮世絵師として、最も活躍した西川祐信である。版元も浮世草子・役者評判記の出版で名高い八文字屋八左衛門がなっている。『西川ひな



近世における『源氏物語』の浸透

形』は、現存は少ないが、享保三年（一七一八）当時広く流布したものと考えられる。

『西川ひな形』に『源氏物語』の影響がはっきり見出せるのは重要である。同書によって、年代が確定できる形で、庶民レベルまで『源氏物語』が浸透していたことがはっきりする。今後の議論の根本資料といいうる。

しかし、『源氏物語』利用の事例はさらに見出せる。櫛・簪における事例である。

三 櫛・簪と『源氏物語』

葛飾北斎『今様櫛搔雛形』（文政六年（一八二三）刊、岩瀬文庫蔵）は、櫛とキセルの図案である。その櫛の図案に、『源氏物語』がらみのものがある。源氏物語は、「浮舟」「朝顔」「紅梅」の三つあげられている。

「浮舟」は、匂の宮と浮舟とを乗せた代表的な場面である。「朝顔」と「紅梅」は、それぞれその巻を象徴する花が、櫛の背に沿ってアーチ形に配されている。櫛の立体性を考慮した図案となっている。

また、溪斎英泉『画本錦之囊』（文政十一年刊、個人蔵）には、簪の雛形が掲載されている。「夕顔」「若紫」「紅葉賀」が『源氏物語』を踏まえている。



まとめ

近世における『源氏物語』の浸透は、従来の想定を超える。そのことは、身近な服飾にまで『源氏物語』が利用されていることから、明白といえる。特に、『西川ひな形』掲載の袱紗を眺める乙女達の図がそのことを如実に示している。

〔付記〕資料の閲覧・掲載を許可くださった関係各位に対し、深謝いたします。